
夢物語 ドリ - ムワールド

西原雛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢物語 ドリ・ムワールド

【Nコード】

N8516X

【作者名】

西原雛

【あらすじ】

2人で愚者討伐を行ってきた廉と瑞希。

ある日討伐依頼を受けて訪れた森で小さな、でも立派な屋敷を見つけた。

それが、すべてのはじまりとなった。

『普通の日常』が終わった日

「廉、瑞希・・・お前らは、立派な賢者に・・・！」

今でも鮮明に残る、あの男の言葉。

あれから、10年も経つというのに

「おい廉！聞ってるか！？」

「わっ！？」

ハッとした。

俺、神奈川廉は親友であり 仲間 であるこの男・相模瑞希の怒号で自分がボーっとしていたことに気が付いた。

「ご、ごめんごめん！ボーっとしてた！」

「ったくお前・・・俺が今回の依頼内容説明してやってんのに・・・」

チツと舌打ちが聞こえそうなくらいイラついている。

サラサラの黒髪に整った容姿。紺色の上質なコートから落ち着いた雰囲気が滲み出ている。

それなのに見た目の割に短気なこいつのことだから、いつものことなのだが。

「・・・でだ。今日見た感じで一番報奨金が高くて俺たちでもできそうな依頼が、これだ。」

瑞希は俺に携帯を突き付けてきた。

この時代、子供でも老人でも、携帯を持つことが当たり前で、1人2台、3台と持つ奴もいるくらい。

携帯は、各々の通信手段はもちろんのこと、あらゆる情報源、そして財布としての役割も果たしている。

更に今の科学技術のおかげで「充電」も必要が無い・・・と、母さんが言っていた。

俺たちはその「充電」っていうのはしたことはないけど。

瑞希の携帯画面を覗きこむと、そこには場所、依頼内容、報奨金が事細かに記載されている。

「場所：英葉山　えいばやま　頂上近辺」

英葉山といえば、俺たちが今いる市ヶ原　いちがはら　町からもよく見えるくらい近い。

・・・まあ、頂上まで登るのはちょっと大変だろうけど。

「内容：頂上で最近目撃された患者の討伐。」

患者の数、およそ3体。すべて中型との情報。」

患者、つまり化け物みたいなものは3体。しかも中型だから俺たち2人がかりなら大丈夫だろう。

「報奨金：30万リフ」

リフとは、世界共通の通貨。患者討伐は世界問題で、どの国でも報

奨金制度は同じ。

だからこの討伐制度ができたときに報奨金を統一化するためにも、まずは同意した世界の9割ほどの国が通貨単位を統一した、と昔学校で習った。

「ふーん・・・これなら楽しそうだよね。じゃあ今日はこれ受諾しようか。」

「ああ。よし！これ受諾するぞ。」

そうやって瑞希は携帯画面に何かを打ち込んでいる。

おそらく『受諾届』のメール文を打ち込んでいるんだろう。

これを送信することで、この依頼は俺たちのものになるのだ。

「じゃ、行くか。」

携帯をパタン、と閉じると席を立った。

そう、ここまででは、普通だったんだ。

山の上には『討伐の天才』がいた

俺たちがいたカフェ『ギルド』からでて、歩いて約20分。

俺たちは英葉山の麓に着いた。

あと普通に歩いて30分程度でこの山の頂上に着くだろう。

「結構遠いよね・・・ロープ ウェイとかあればいいのに。」

俺はため息をついて行った。

「仕方ないだろ？この山には歴史的にも重要な樹木や遺跡だってあるんだ。」

「そう簡単にロープ ウェイ業者が介入できるわけないだろ。」

バツサリ瑞希に切られた。

たしかにこの英葉山には、樹齢何万年（詳しくは知らないけど）の木がたくさん生えている。

しかも中腹には古来この土地に住んでいた人間が暮らしていた住居跡が点在している。

研究は進んでいるらしいけど、いまだ謎が多い山。

たしかに、患者の巣窟になっていても不思議じゃない。

「ほら、行くぞ。」

「パパッと終わらせて報酬もらおうぜ。」

「・・・そうだな。」

俺は半ば瑞希に引っ張られるように山に入った。

少女と交渉

「この山に住んでいるただの女の子だよ」

「……」

「……」

「…どうしたの？」

沈黙を破ったのは少女。

その間抜けな少女の声に、瑞希の何かが外れた。

「…嘘つけ！！ただの女はそんな変な和服着てねーし

山にも住んでねーし、ましてや銃であんな熊倒せるワケねーだろ！

！」

「瑞希がキレた…」

今日の瑞希は喜怒哀楽激しいなあ」

最も、出しているのは主に怒の部分だけだけど。

「はあっ!？」

私は生まれてから今までずーっとこうやって暮らしてきたんだよ!？」

これが当たり前前の生活なんだから!！」

少女も瑞希に負けない短気な性格みいだった。

でも、そんな分析よりも俺は少女の言葉に耳を疑った。

「…まっつて！」

じゃあ、この愚者の巣窟でずっとこの山でそうやって愚者倒しながら暮らしてきたっていつの…？」

「そうだよっ…！」

「嘘だろ…！？」

バーン！！という効果音が付きそんな堂々とした面持ち。

瑞希も言い争いを止めて彼女を驚きの眼差しで見つめている。

「…何？」

「お前、誰かと一緒に暮らしてんのか？」

「…今は1人。山の頂上の方にある家で暮らしてる。」

「…今は？」

「2年前、一緒に暮らしてたナズナおばさんはどこかに行ったまま帰ってこないから。」

さっきまでの怒り顔とは違つ、心底悲しそうな顔。

なんか、そんな少女を見ると、なんとかしてあげたくなった。

「…ねえ、君の名前は？」

「えっ!?!」

唐突な俺の質問に、少女は目を見開いた。

「大城、桃李。」

「ただ、それがどうしたの？」

「よし！桃李、そのナズナおばさん、俺たちと一緒に今から探しに行こう！」

「はあああつ!?!?!」

桃李と瑞希の声が重なる。

「おい廉!!何勝手に言い出してんだよ！」

「だってこの子このままじゃ可哀想だし…！」

「そういう問題じゃなくてだな…！」

俺と瑞希が桃李に聞こえないようにコソコソと話していると、唐突に桃李が口を開いた。

「本当に…探してくれるの？」

それは、弱弱しい、だけど真剣さが含まれた声色で。

俺たちは思わずその言い争いをやめて彼女の顔をじっと見てしまう。

「また…ナズナおばさんに逢えるの？」

今にも泣きだしそうな顔。

「…あーもう！調子狂うな…。」

とりあえず事情は聞かせる。探すかどうかはそれから！」

面倒くさそうにそうに瑞希は言った。

その言葉に、俺は安堵の笑みを浮かべる。

「わかった…ありがとう！」

桃李は、今までの表情の中で一番優しい笑顔を見せた。

俺たちが桃李に連れられたのは頂上に近い場所にある古びた屋敷。屋敷自体は古いけど、西洋造りで立派な趣はある。

「でけえ屋敷だな。」

「ここに2人で住んでたの？」

「そう。…そういえば、2人の名前は？」

「ああ、忘れてた。俺は神奈川廉。」

「花形瑞希だ。」

ギイイ、と重そうな扉を開ける。

「私は物心つく前からここに住んでたの。」

ナズナおばさんに聞いたんだけど、この山はもともとナズナおばさんの家系の私有地で、

昔は人もいっぱい住んでたの。

でもその家計がナズナおばさんで途絶えて、今残ってんのはこの山の所有権だけ。

だからこの山で私たちはさつきみたいに熊とかを狩ったり木の実や野草を採取して暮らしてきた。」

長い廊下を歩きながら桃李は言った。

「…えらい原始的だな。」

「そうでもないよ。たまに山から下りて買い物だってするし、携帯も持ってる。」

そう言って着物の袖からピンク色の携帯を見せた。

機種は新しいほうで、可愛いウサギのストラップもついている。

「本当だ…でも、携帯持つてるならナズナおばさんとも連絡取れるんじゃない？」

「そんなのとつくの昔に電話もメールもしたよ。

帰って来ないからこんな状態なの。」

「そっか…。」

ギィ、とまた重そうな扉を開ける。

中は昔の応接間のように、高級そうなソファや備え付けの暖炉、その他級そうな調度品が並んでいる。

広さはだいたい30畳ぐらいだろうか。

「…にしても、こんな洋風の家に和服はにあわねえな…」

桃李の服装を見て瑞希が言った。

「うっさい。これはおばさんの趣味なの。」

「で、桃李。さっきナズナおばさんの家系…って言ってたけど、ナズナさんとは親戚関係とか、

血縁者とかじゃないの？」

「ああ…話長くなるから、とりあえず座って。」

俺と瑞希は中央のソファに座った。

部屋の中をゆっくりと歩きながら桃李は言った。

「もともと私、生まれて間もないころ…実の両親に捨てられたんだ。」

「えっ!？」

「それを拾ってくれたのがナズナおばさん。」

偶然山から下りたら、道の脇の空き地に捨てられている私を見つけただって。

だから私たちに血のつながりは無い。」

「そうだったんだ…」

「そのナズナおばさんがいなくなった経緯は？」

「2年前の冬…いつも通りここで晩御飯を食べて、おばさんは私に言ったんだ。」

「今日は夜中相当冷えるみたいだから、早く寝なさい」って。

そういうことは前に何度かあったから、何も疑わずに自分の部屋に行ったの。

私の部屋はこの屋敷のエントランスのちょうど真上で、窓から玄関先がよく見えるんだ。

で、真夜中、偶然目が覚めて、玄関先から物音がすると思って窓の外を見たら、

おばさんが急いで外に走っていきのが見えた。

…なんだろうと思って、私も上着を着て銃を持って外に出たら…もうそこには誰もいなかった。

それが最後。それから、ずーっとおばさんは帰って来ないし、なんの手がかりもない。」

「…」

2人はその話を聞いて黙り込む。

「今思えば、おばさんには不可解な点がいくつかあった。

例えば、私に聞こえないようにコソコソ誰かと電話してたり、

どうしてもおばさんの部屋には入れてくれなかったり。

私は拾われた身分だから何も言えなかったけど、おばさんがいなくなってから、

おばさんの部屋にはこっそり入ったの。」

「…どうだった？」

ああは言っていたものの、瑞希も真剣に桃李の話を知っているみたいだ。

「書類の束のファイルがいっぱい本棚に並んでいた。

真ん中の机の引き出しには、コレが入ってた。」

そこで桃李は脇の棚から何かを取り出して俺たちの前のローテープルに突き出した。

小さな手帳とカードのようだ。

「BCCL…?」

手帳にもカードにも、そのアルファベット3文字が大きく書かれている。

瑞希はその3文字を訝しげに復唱する。

「BCCL。これを見つけた時、調べてみた。」

BCL:「battle cyborg laboratory、つまり戦闘用人工人間研究所。ネットで調べてみたんだけど、公式HPも無いから公な組織ではなさそう。」

でも、とある掲示板でこんな情報を見つけた。

身寄りのない子供を施設に集めて、戦闘に特化する様に改造をしているらしい?…って。」

俺はそれを聞いて1年前に聞いたある噂を思い出した。

「!…!言われてみれば、その組織聞いたことある!

でも1年前…そのBCLは施設自体が何者かに破壊されたって…」

「何それ!」

「俺も初めて聞いたぞ、廉。」

「去年、俺久しぶりに母さんのところに戻ったんだ。

そこで、母さんが誰か偉い人とそんな話をしていたのを聞いた。

でもニュース記事には出てなかったから…公には公表できない事件だったんだと思って

誰にも言ってなかったんだけど…」

「…廉のお母さんって何者?」

桃李はサラッとそんなことを言う俺に問う。

「ああ、俺の母さん、国際警察の重役なんだ。

俺はそんな堅苦しいのは嫌だから今は瑞希の家に居候してるんだ

けどね。」

「へえ…でも、破壊されたって…どういうこと？」

「詳しくは俺も断片的にしかその話を聞いてないから知らないんだけど、

火事とか、薬品が爆発したとか、そんなんじゃないかってなんかこう…何か恐竜みたいな強大な質量を持った個体が、物理的に施設を壊しまくった…っていう感じ？」

「恐竜って…」

「…とりあえず、その組織について調べてみないとな。」

瑞希は言う。

（お金絡みじゃないのに瑞希が仕事するなんて珍しい…）

「…うん。あ、えっと。」

廉、瑞希、よろしくお願いします！

私も戦闘なら協力できるから！」

ペコリと頭を下げる桃李。

「ああ。」

「こちらこそ、よろしく！」

新生活！

「ほら、飯だ。」

所変わって、ここは瑞希の自宅。

ネット環境の充実性や、その他生活環境の良さを考慮して、ナズナさんの搜索：及びBCCLの調査の為に桃李も俺と同様瑞希の自宅に居候することになった。

もともとファミリー向けのマンションだから1人暮らしには広すぎる一室。

俺が瑞希の所に居候することを考慮してこのマンション選んだのだ。もちろん、家賃はきつちり折半だけだ。

初めて見る近代的な造りの家に、きよろきよろと周りを見回す桃李。そんな桃李に瑞希はトン、と皿を置く。

今日の夕飯はオムライスのようなようだ。

焦げ目も破れも一切無い美味しそうなオムライス。

それに桃李は目を輝かせた。

「なにコレ！ネット以外で初めて見た：これがオムライスかあ：美味しそう！」

「言っただねえで早く食べよ。」

キッチンからもう2つのオムライスを持った瑞希が呆れた顔で登場する。

それを俺と瑞希の前に置くと瑞希自身も椅子に座る。

「うん！いただきます！」

パクツと一口口に入れる桃李。

その瞬間、表情はより一層輝きを増した。

「美味しい…！瑞希意外と料理上手かつたんだ…！！」

「意外とつてなんだ。」

「瑞希意外と料理…っっていうか家事全般完璧にできるんだよ。」

「お前も意外とつて言うかよ！」

「へえ…瑞希“意外と”家事できるんだねえ…」

「今わざと言つたよな？オムライス取り上げんぞ！？」

そんな“瑞希イジリ”を終えると、俺は純粹な疑問を桃李に投げかけた。

「でも桃李、2年も一人暮らししてたんでしょ？だったら家事できるんじゃないの？」

「んー…でもこんなにおいしくはできなかつたなあ。」

料理なんて 肉は焼くだけ野草はそのまま だったからなあ。」

「ある意味男らしいな…」

「じゃあ料理は瑞希に全面的に任せるとして…」

「あつ、掃除洗濯ならできるよ！」

「居候する代わりにそれは任せようよ。」

「そうだな。」

ちょうど空になった皿の前で桃李は手を合わせると、言った。

「ごちそうさま！じゃあさっそく洗濯させていただきます！」

そういうと、持ってきた荷物をがさがさと漁る。

「「？」」

その動作に疑問を持つ俺たち。

「あつた！」

それは、俺たちも生では初めて見た

「洗濯板！？」

「ちよつ、待て！！お前まさかそれで……」

「え？洗濯と言えば……これでしょ？」

「「んなの初めて見たわ！！」」

「うそ！」

「……俺後で洗濯機の使い方教えとくよ……」

「……頼んだぞ。」

この娘に一般常識を期待した俺たちがバカだった……
未だに洗濯板を抱える桃李を見て痛感した。

「それでさあ。今更だけど、「賢者と愚者」とかって何？」

洗濯板を鞆に戻した桃李は言った。

「えっ！？ネットはできるのに……っていうかあんな銃でバンバン倒してたのに知らないの！？」

「廉、こいつに常識を期待するな。」

「そうだった…桃李。」

まず歴史の話からになっちゃうんだけど…古来人間と鳥獣は共存して生きてきたんだ。

でも数百年前、ヨーロッパ全土にある事件が起きた。鳥獣たちが狂ったように人間を襲う…

「自然共存の崩壊 ナチュラルロースト」と呼ばれる事件。

そこで、人間たちは鳥獣たちを「愚者」、それを討伐する人間を「賢者」と名付けたんだ。

俺たちを含め、賢者たちは「世界賢者機構」に所属して、愚者の討伐依頼を受けて討伐したり、

犯罪を犯した賢者を捕えるんだ。

依頼を受けるかどうかは個人の自由。そのかわり、依頼が達成されたら高額な報奨金が

受け取れるんだ。」

「んー…なんとなくわかった！でも…賢者になるには

世界賢者機構に所属するのが必要なんですよ？じゃあ…私も所属するべきな？」

「ああ、そうだね。なんなら今登録しとく？」

「登録制なの？」

「桃李、携帯貸して。」

俺は桃李の携帯を受け取ると、ネットに接続してあるHPに入った。

「見て桃李。ここが世界賢者機構のHP。」

完全紹介制だからこのURLは検索除けが掛かってるし、登録にも紹介者のIDが必要なんだ。

この場合紹介者は俺。俺のIDはもう打ち込んだから、あとの項目を入力して？」

そう言っつて携帯を桃李に返す。
その様子を見て心配ないと思ったのか皿を片付けてキッチンに戻っ
ていく瑞希。

「わかった!」

記入項目は名前、生年月日、電話番号とアドレス、使用武器、拠点
地区。

軽快にそれらの項目に文字を入力していたけど、すぐに桃李の手が
止まった。

「どうしたの?」

「…私、自分の誕生日知らない…」

「…あ。」

そうだった。桃李は捨て子だったんだ。

年齢はともかく、誕生日は知らなくてもおかしくないだろう。

「今日でいいんじゃないの?」

「…え?」

キッチンから突然聞こえた声に、俺たちは間抜けた声を出してしま
った。

「だから、誕生日。身分証明書がいらねーんだから、誕生日を何時
つて書いても

嘘だつてバレねーだろ?」

洗い物をしながらそう言う瑞希。

「そうだよ。今日にしよう！桃李の誕生日！」
「…うん！」

桃李は生年月日を入力する。

3月15日。

「使用武器、銃火器。拠点地区、日本。これでOK？」
「うん。じゃあ入力完了のボタンを押して。」
「ん。」

桃李の携帯に登録完了の画面が表示される。

「よし！これで終わり！」

「簡単だね…。」

「まあなるのはね。」

さ、瑞希も洗い物終わったし、本題に入ろう。」

姉と足音

次の日。

「その服装は何とかならねーかなあ……」

瑞希が怪訝な顔でそう呟いたのは、桃李の服装を見てのことだった。短い丈の袴姿。

それは外を歩くにはあまりにも目立ちすぎる。（現に昨日屋敷からここに来るまでも目立った。）

「そうかなあ。でも私和服しか持ってないし……」

「…仕方ねえ。」

瑞希は携帯を手に取り、それを耳に当てた。

「どこにかけるの?」

俺が聞くと、瑞希はそのままの姿勢のまま言った。

「姉さんだよ。」

* * *

「瑞希イイイイツ!!!」

「はやっ!?!」

「おおっ!?!」

5分後、マンションの玄関を開けたのは黒髪ストレートのロングヘアの美人。

スーツ姿で仕事もできそうだけど、そんな雰囲気は彼女の剣幕で今はかき消されている。

「だ、誰?」

「ああ、瑞希のお姉さん。すごい仕事もできて賢者としても強いんだけど…ブラコンなんだ。」

「ああ…」

ハートを振りまいて瑞希と話す彼女を見て納得する桃李。

「!?!」

不意に、彼女は桃李と俺のほうを向いた。

「あなたが桃李ちゃん!?!」

「あ、は、はい!」

愛しい弟が自宅マンションに連れてきた同年代の女の子。(この場合俺もいるけど。)

その状況は、桃李をビビらせるには十分な条件だった。しかし次の瞬間…彼女は桃李に抱きついた。

「…可愛い!ビビってる姿すら可愛いわ桃李ちゃん!」

私は瑞希の姉の花形祐希!よろしくね桃李ちゃん!」

「あ、ありがとうございます…ちょ、あの、ぐるじい…！」
「あら、ごめんなさい。」

祐希さんの胸に顔をうずめられ、窒息しそうだった桃李。（正直、
ちよつと羨ましい）

息遣いの荒い桃李の腕を掴んで、祐希さんは言った。

「瑞希、桃李ちゃんの部屋ってあそこ？」

「ああ。」

「よし！じゃあいくわよ桃李ちゃん！しばらく待っててね、瑞希、
廉。」

ズルズルと桃李を連れて玄関近くの一室に桃李と持ってきた大きな
紙袋を持って、
入っていった。

ボタン、と扉を閉める。

中は、だいたい6畳ぐらい。家具は一切なくて、大きなクローゼツ
トだけがやけに目立っていた。

誰も使っていないことは明らかだった。

「ここが桃李ちゃんの部屋よ。家具も揃えないとね…」

…話は全部瑞希から聞いたわ、桃李ちゃん。」

「あ…」

「大変だったわね。私もできることがあれば協力するわ！

私のことお姉さんだと思ってくれていいのよ！桃李ちゃん！」

「ありがとうございます。」

「いいえ！」

ニコリと綺麗に笑う祐希さんに、思わず安堵の表情を見せる。

「私が来たのは、桃李ちゃんに洋服を持ってくるためなの。
急だったから私のおさがりで悪いけど…ほら！」

バサツと紙袋の中の大量の服を床にぶちまけた。服はもちろん、靴や靴もある。

「ありがとうございます！」

「お礼なら瑞希に言っ。それより、桃李ちゃんに似合いそうなの
のは…」

素早くこれとこれと、と服を選んでいく祐希さん。
そんな祐希さんに、桃李は再び安心感を覚えた。

* * *

「できたわよ！」

「ああ。」

「似合うじゃん。」

祐希さんチョイスの服装は、花柄のシフォンワンピースに黒のニー
ハイソックス。

彼女の雰囲気によく似合っている。

「よし。じゃあ行こう。姉さんありがとう。」

「いいえ！じゃあ服をクローゼットに片付けたら私も仕事行くわね。」

「本当に、ありがとうございます！」

「フツツ…頑張りなさいよ、瑞希、廉、桃李ちゃん。」

再び綺麗に微笑む祐希さん。

そんな彼女に見送られながら3人は事件現場に向かった。

* * *

「あの夜…なんていうか、巨人の足音みたいな音がして、驚いて窓から外を見たら、

どんだんあの建物が壊れてて…でも大型愚者もいなかったし、不良の集団みたいにたくさん人もいなかった。

まるで…巨人の幽霊がどんだん建物を踏み潰していくような…」

「…はあ？」

「ちよ、瑞希！」

近所の子供の証言。

その言葉に悪態をつく瑞希を、俺は急いで止めた。

「と、とにかくありがとうございます！」

にこつと桃李が笑顔で言うと、男の子は顔を真っ赤にして去っていった。

「…収穫なしか。」

さっきの証言はカウントしないらしい。
俺たちは再び周囲を周ることにした。

* * *

「ん・・・」

廃工場の中の古びたソファで、彼女は目を覚ました。

古い備品しかない廃工場は、ガランとしていて肌寒い。

ゆっくりと身を起こすと、パサリと被っていた帽子が落ちた。

カーキ色の彼女には大き目なキャスケット。天辺には白いポンポンが付いていて、

側面には数字が刺繍されている。

“ 8 ”

それは、彼女を“ 判別 ”するものであり、彼女の“ 名前 ”だった。

その数字が彼女の瞳に映る。

ドクンッ

彼女の心臓が大きく波打つ。

そして…彼女は自我を失った。

そばに置いてあった自分より大きな、はるかに彼女より重そうなハンマーを

軽々と持ち、簡単に振り下ろした。

* * *

ドオオオオソッ

「「「!!!」」」

遠くから、大きな衝撃音が聞こえた。
それはまるで、“巨人の足音みたいな”。

「…行こう!」

3人は、その音の方向に走り出した。

捕獲成功

「なっ…なんだよこれ…」

言葉を発したのは俺だけ。

瑞希と桃李は言葉を失ってその光景をただただ見つめるだけだった。

俺たちが来たところには、もう廃工場だった建物は瓦礫の山と化して
いて。

その空間は土埃を上げてよく見えなかった。

いつの間にか近隣住民はその様子を見て、急いで非難し始める。

「…同じだな。」

瑞希が冷静に分析するように言う。

「…あ!!！」

「なんだ!?!」

不意に桃李が小さく驚いた声を出した。

「あそこ…人影が見えない?」

「どこ!?!?」

土埃を目を凝らして見る。

どうやら自然の中で暮らしていた桃李は人一倍視力が良いらしい。それを理解したのか、瑞希が桃李に言った。

「おい、俺にはわからねえ。どの辺か言え。俺が捕まえる。」

「ん。…あの、真ん中のほうに大きな柱があるの。」

そのそばに…ソファ？ベッド？…とにかく何か長方形のフワフワが見える。

そのあたりに…ハンマーを持った小さい人影が…」

「わかった。」

桃李の言葉を最後まで聞かずに、瑞希は土埃の中に入っていった。

* * *

「…つつても、この土埃の中じゃ「長方形のフワフワ」なんて見つけられねーよ！」

土埃の中、薄目を開けて進む瑞希。

「…しゃーねえ。」

右腕の袖を捲る。そこには、何か象形文字のようなものが刻まれている。

瑞希はその刻まれた象形文字に左手をかざした。

ヴォン…!!

その瞬間、まるで「光」を凝縮して出来たような、光の鞭のようなものが現れた。

その光のおかげで、多少は見晴らしがよくなる。

「…いた。」

辺りを見回せば、ようやく人型の影を見つけることができた。

瑞希は手に持っていたその光の鞭を振る。

鞭はまるで瑞希の手足のように自在に、瑞希の思うままの軌道を描き、

影の主を捕えた。

「…あつ!」

その瞬間、小さな、甲高い声が聞こえた。

「…女?」

少しずつ、光に従い影に近づくと瑞希。

「~~~~~!」

鞭を伝って抵抗されているのがわかる。

それも、かなり激しく。

その力は、明らかにさっきの甲高い声から想像できる女の子の力を超越している。

「…まじかよ?」

影の主の姿をようやく捉えた瑞希は、その姿に思わず声を漏らした。

* * *

「遅いね瑞希…」

隣の桃李がぼそりと言った。

「…瑞希には悪いけど、土埃払っちゃおうか。」

俺には一つ策があった。

「え?出来るならやった方が良くない?」

何が悪いの?という表情の桃李。

「…ま、いつか。」

瑞希ごめん、家屋破壊の犯人を捕まえるために…「巻き添え」になつてくれ。

俺は鞘から短刀を4本取り出し、その4本に力を込める。

そして、その4本を　　思いつきり、土埃の空間の上空4隅に投げた。

昔から使っている俺の武器は、俺の思つた場所へ的確に飛ぶ。

「よし！」

全てが狙いの位置に並ぶと、その場所だけは無重力空間になつたように、プカプカと浮いている。

「えっ？ 剣が浮いてる…!？」

初めて見る俺の能力に、驚いている桃李。

「…水撒！」

短刀に囲まれた四角形に…雨が降る。

「…すごい…雨が降ってる…」

「これで土埃は消えるでしょ。ただ…」

「おいてめえ廉！！！！」

勝手に俺の上に雨降らすな！見るよ雨と土埃でドロッドロじゃねえか！！」

すぐに現れた瑞希は、水を含んだ土埃でまさに泥まみれになっていた。

「ほらね、こうなるからちよつと躊躇ってたんだ。」

「ああ…ドンマイ瑞希」

「ドンマイじゃねえ！」

「で、捕まえた？」

「俺はお構い無しかよ…捕まえたよホラ…ってああ！！」

光の鞭を辿り見る瑞希が、先を見て奇声を上げた。

俺たちも光を見るが、その先には何も生物は見えない。

ただ、鞭の先が引きちぎられたようにボロボロになっている。

「な…俺の光鞭を引きちぎるなんてどんな力なんだよ…」

「どんな奴だったの？」

鞭を見て絶句する瑞希に、桃李は尋ねた。

「それが…変な作業着着て、それと同じ素材の帽子被った…女。」

「…女！？」

「俺も信じられねーよ。でも確かに、女だった。」

「あの……」

「そう、こんな声の……」

不意に背後から聞こえたか細い声に振り向く。

背後にいたのは。

カーキの作業着とそれと同素材の帽子を被った。

小柄で、か弱そうな。

でも、たしかに後ろに回された手には彼女より大きなハンマーが握られていて。

腰には瑞希の光鞭が今もなおキツく巻きついていていた。

破壊の人造人間

「こいつだ

!!!!」

しばしの沈黙の後、3人の声が重なった。

「きゃあっ!!」

その声に驚く彼女。

光鞭で腕を胴体ごと固定されている為上手くバランスが取れずその場に転んでしまった。

「ご、ごごごめんなさい！あああなた達の前に現れてすみませんでした!!」

小さく縮こまりそのか細い声で謝罪の言葉を連呼する。

桃李はその服装をまじまじと見ていた。

作業着は彼女にジャストサイズだが、下がショートパンツになっていて

編み上げ式のニーハイブーツを履いている。

そしてその珍しい恰好よりも気になったのが、

右腕に付けられた腕章に「BCL」の文字と大きく書かれた「8」という数字だった。

その数字は、帽子にも大きく刺繍されている。

「…おい。」

「ひゃっ！…は、はい！」

恐る恐る顔を上げる少女。

「俺はさっきお前を捕獲しようとしてた。

お前は俺から一度逃げられたのに、なんで戻ってきたんだ？」

少女に視線を合わせるように、瑞希もその場にしゃがみ込む。

「あの…脚を使ってこの光自体は引き千切ることができんですけど…

どうしてもこの腰のあたりの光は足も届かないし…千切ることが
できなかったの…

なんとかしてあなたにこれを解いてもらえないかと…思いました

…

言葉が終わるにつれて声量が小さくなる。

真っ白だった肌も今は真っ赤になっている。

「なるほどな。」

…でもこつちにも事情があるんだ。お前に少し話がある。

おい廉、桃李。こいつ一旦マンションに連れてくぞ。」

「だ、だめ！」

さっきの弱い語気とは打って変わって強く言う少女。

「…なんでだ？」

「あの…私があなた達のマンションに行けば…また…壊しちゃうか
もしれないから…」
「どうということ?」

俺も口を開いた。

「話せば…長くなるんですが。」

「まあいい。外で聞こう。」

もうすぐここにも警察が来そうなので、その近くの公園に移動する。

「まず、あなたの名前は?」

桃李が優しい口調で尋ねた。

「…エイス。と、呼んでください。」

「エイス?外国人?」

「いえ、日本人です。…おそらくは。」

彼女の髪はウェーブ掛かったボブで金髪。しかもその肌の色はかなり白い。

一見して西洋人に見えたけれど、確かに顔立ちは日本っぽいし日本語も流暢だ。

「おそらく?」

「私には、両親はいません。」

私が幼稚園児の頃、何者かに殺され、私はBCLという組織に連れていかれました。」

「BCL…?」

「…ご存知ですか?」

「昨日、廉…こいつにその話は聞いた。」

俺を指しながら言う瑞希。

「じゃあ…内情もご存知ですね？」

彼女、エイスは俺を見る。

「…身寄りのない子供を組織に連れてきて、改造という名の人体実験をするっていう？」

「そうです。私は…」

その改造を施された人造人間です。」

「「「！」「」」

「改造人間の成功例は、私を含めて全部で13人。

成功例、なので改造手術を受けた子供はおそらくその何百倍の人数でしょう。」

何せ、その改造手術に耐えうる体力、精神力を持つ子供はそう簡単にはいません。」

「つまり…あの施設では何百人の子供が死んだってこと？」

「はい。私は運良くというか…その成功例です。」

成功例には数字が与えられ、私はその8番目の成功例、なので私は eighth、

つまり「エイス」と名付けられました。」

「…わかった。」

エイス、思い出すのも辛いだろうけど、BCLの内情、あと何で

BCLが崩壊したかの
経緯も教えてくれないかな？」

俺は極力優しくエイスに言った。

「… BCLの研究者は、人造人間の私たちに対して、とても優しく
つたです。

なにせ、貴重な成功例ですから。

戦闘訓練や知識・教養は勿論教えられました。

人造人間が持つ能力はそれぞれ違いました。

銃で撃たれてもすぐに治る「治癒」の力や食事や睡眠を取らなく
ても生きられる

「保存」の力、あとは一度見たものは忘れない「記憶」の力など。

」

「… エイスは？」

「… 「破壊」です。」

「破壊…！？」

「私が壊したい、と思ったものはどんな鋼鉄でも巨大な生物でも壊
すことができます。」

… BCLにいたころ、私はもう一人の人造人間とペアでした。

「彼」は、ナインス。9番目の人造人間です。

ナインスの能力は「抑制」。私が絶対的な破壊の力を持つゆえ、
急いでそれを抑える為にBCLが急いで作り上げました。

彼の能力にかかれば私の破壊能力は半減し、破壊衝動も抑えられ
ます。」

「そのナインスは…？」

「私は昔から弱虫で、人見知りで、内気で…
だからずっと一緒にいたナインスは私に嫌気がさして…
ほかの人造人間たちも含めて、私に対するイジメが始まりました。
破壊の能力を持つ私は…だんだん追い込まれて…
ある日、ナインスは私の、この帽子をどこかに隠しました。
それを必死に探して…やっと見つけた時、私は思い切って
ナインスになぜいじめるのか聞きました。彼は、ハッキリと答え
てくれました。」

「お前が弱虫なくせに破壊の能力を持つてるなんて許せねえんだ
よー！」
…って。」

「酷い…」

「そこで私は…リミッターが外れてしまいました。
そこからの記憶はありません。」

おそらく、このハンマーで…BCLの研究所ごと、優しかった研
究員も、

私をいじめた人造人間も、破壊してしまっただんでしょう。
気が付いたら、瓦礫の山の上に立っていました。

…それから。私はこの帽子を自分の目で見てしまうと、

リミッターが外れて自分がいる建物を問答無用に壊してしまいま
す。」

「じゃああの崩壊事件も、連続家屋倒壊事件も、全部エイスが…！
？」

「はい。全部私が…」
「待て。疑問がある。」

「治癒」や「保存」の能力のある人造人間は、
お前が破壊したとしても生き残れるんじゃないのか？」

「いえ…たぶん、もう死んでいるでしょう。」

建物ごと破壊したので2人とも生き埋めです。

治癒のファイフスも、保存のトウエルフスも瓦礫の中から脱出できるような力はありません。」

「なるほどな。お前が人造人間の中で最強なのはよくわかった。お前が今唯一の人造人間なんだな。」

「…唯一、生き残っている可能性のある人造人間がいます。」

「どんなやつだ？」

「サーティーンズ…能力は「液化」。」

「液化!?!」

「その名の通り、体を液体にすることができるといいます。」

「彼」なら、あの瓦礫の中から抜け出すことも可能かもしれない。ん。」

「なるほど。」

「あの…話しましたし…この光解いてくれませんか？」

「待って。あなた…ナズナっていう人、知らない？」

桃李が、核心に触れた。

「ナズ…ナ…?」

エイスの瞳が、揺れる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8516x/>

夢物語 ドリ - ムワールド

2012年1月6日15時49分発行